

空海 70考



- 一 貴物（とふともの）「真魚のルーツ」
「讚岐国多度郡屏風浦」の水と豊穰
- 二 「神の御子」を受胎した母神伝説
玉依姫伝説と空海誕生地異説
- 三 神童の靈感的氣質
漢籍の素読暗讀スキルワーク
- 四 漢學寮への受験勉強（漢籍訓詁学）
平城京の寄宿先「佐伯院」
- 五 大學寮の基幹学科「明經科」
仏法の衝撃と中國的価値世界への決別
- 六 漢籍の素読暗讀スキルワーク
木食草衣の乞食行者
- 七 命がけの難密修驗
- 八 边路（へち、へぢ）と海上他界と神仏習合と
虛空藏求聞持法の練磨と捨身
- 九 「辺路（へんろ）」真魚の不殺生伝説
明星口二入り虛空藏光明照シ来り
- 十 四国隨一の靈山での修驗苦行
「沙弥」教海の仏教修理への昂ぶり
- 十一 律僧鑑真の決死の「四分律」とアジアを知る
雜密修驗から大乘瑜伽行（唯識）思想へ
- 十二 朝廷貴族の雄藤原氏一門との親和
華嚴を修め『三教指帰』を著す
- 十三 密教仏と『大日經』と梵字・悉曇との出会い
『大日經』の夢告
- 十四 具足戒を受け「官僧」空海へ
- 十五 第十六次遣唐使船「よつのふね」に乗る
「大輪田泊」から「牛窓」「室ノ津」
- 十六 「鞆ノ浦」そして「風早ノ浦」
遣唐使船建造修理の島「長門ノ津」
- 十七 潮流逆巻く海峡「早鞆ノ瀨戸」
西の外交交易の玄関「那ノ津」に着く
- 十八 大宰府「鴻臚館」
- 十九 難破船で唐土「赤岸鎮」に漂着



空海誕生所 善通寺大師堂

屏風ヶ浦 五岳山

異能の人空海が、いつどこで何を学び体験し身に付け、直感し思索し構想し、そして創案し講じ実践したか、さらに究極空海密教として創出された言語哲学とは何か、その真相にリアルに迫る少しラジカルな空海ノートである。



高野山奥の院 御廟橋

空海の多重多元・高速大容量の密教は、宇宙回線を使い、重々無尽のデジタルネットワークを先取りしていた

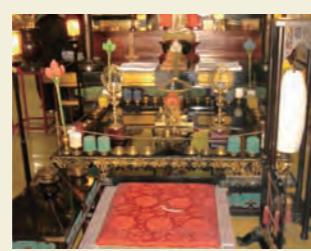
- 一 益田池碑の基台といわれる岩船
- 二 長い船旅から険しい陸路へ
延暦二十三年十二月二十三日、長安城に入る
- 三 「京杭大運河」の水運
般若三藏の華厳とサンスクリット指南
- 四 密教伝法の祖師善無畏・金剛智の聖蹟参拝
惠果和尚から正統密教の師位を受ける
- 五 禅を知つて禅をとらず
禪を知つて禅をとらざ
- 六 請來品のなかの『金剛頂經』系經軌の多さ
虚シク往ヒテ實チ帰ル
- 七 独自の「顯教」「密教」構想
声心雲水俱ニ了々タリ
- 八 平安京における密教弘法
嵯峨天皇の政と文芸のサポート
- 九 東大寺二月堂「お水取り」（修二会）の密教化
国家のために東大寺に灌頂道場を開く
- 十 早良親王の怨靈（御靈）鎮め
嵯峨天皇の政と文芸のサポート
- 十一 丹生一族の神と高野山入山の神託
高野山造営の政所と母の菩提と弥勒慈尊
- 十二 聖俗往還の密教イニシエーション
古代宗教の聖域に造営する密教道場
- 十三 空海密教のグローバリゼーション
故郷「真野」の田を潤す満濃池のアーチ式ダム
- 十四 国家鎮護の立体曼荼羅
「請雨法」による密教祈禱
- 十五 淹溉用水池堰堤に残る雑体書法
東寺の稻荷神と秦氏の稻荷山と御靈会と
- 十六 行基の残した港湾の水利ディベロップメント
日本初の庶民子弟のための私立学校
- 十七 不滅の滅
「世界遺産」空海
- 終章



復元された遣唐使船



大興善寺 空海大師像



青龍寺 惠果空海紀念堂内大壇



龍門石窟 大盧舍那佛



大峯山登山口の一つ
洞川の発心門

空海ノート

Hirotaka Nagasawa
長澤弘隆 著

◎密教21フォーラム事務局長

推薦●松岡正剛 [まつおか・せいごう]
(編集工学研究所長)

弘法大師空海を辿るということは、密教者や密教研究者でなくともたいへん誘惑的なことである。司馬遼太郎の『空海の風景』は、日本人の誰にも空海の旅がありうることを示したという意味で、大きな示唆を与えたものだった。しかし、その辿り方にはむろん幾通りもの道があつてよかつた。足跡を辿る、著作を辿る、そのテキストの細部を辿る、真言密教としての教義にもとづいて辿る、自分が触れてきた大師との出会いを辿る、多様な人脈を辿る、空白を埋めながら歴史を辿る。

いずれの方法にもそれぞれ深い意義があるが、今度、長澤弘隆さんの選んだ方法は、空海の生涯と思想を辿るとともに、そこに先人の空海研究が辿った道を多重に織り成して、さらに独自の発見

を加えていくというものになった。それゆえ切っ

先が自在になっている。

すでに多くの研鑽を積んで来られた長澤さんに も、この方法はご自身に思いがけないほど豊饒な思索をもたらしたのではないかと思う。そのことを悦びたい。空海を想い、空海を綴るとは、自在な思想の極みに向かって遊ぶということでもあるからである。

とくに終章において、西田幾多郎と鈴木大拙を相手に空海自身が二人の哲学にさまざまな注文をつけるというくだりは圧巻で、21世紀のいま、こんな展開をたのしみながら言及できる密教者はなかなかいないのではないかと思う。多くの読者がぜひとも目を通してほしいところだ。

かくいう私にも「松岡さん、もっと空海に遊んでくださいね」と引導を渡されたような気がして、身が引き締まった。本書『空海ノート』は『空海21世紀ノート』でもあったのである。

この一冊で
大師と大師密教の
すべてがわかる！

ハブル社

定価 1,540円

本文写真
口絵カラーワ 写真
四六判
総四六〇頁
上製
力バ
ー装



空海は言語哲学の人であった。
言語哲学こそが
空海密教の理趣である。

空海の言語哲学の基盤は梵字・悉曇つまりサンスクリットの素養にある。空海はおそらく、インドの古典言語であるサンスクリットを本格的に習得したはじめての日本人であったろう。空海は長安留学中インド僧の般若三藏や牟尼室利三藏から直接生のサンスクリットを教わった。そしてその言語の力を「法仏(法身大日如来)のコトバ」(「真言」)につなげた。

それは西洋神祕思想がいう「神のコトバ」の地平であり、「コトバからすべての存在が生ずる」言語哲学の命題である。井筒俊彦はそこに着目し、空海の「法身説法」すなわち「果分可説」を広く東洋や世界の言語思想に共鳴する主張だと評価した。

空海は、異国の思想や宗教に通じ、異国の言語を解し、異国の文芸文化を身につけ、世界のレベルで「日本の方法」を創案したマエストロである。そこにやっと現代を代表する知性から視線と評価が集まるようになった。空海はもつと、各界各層の人にその真意・真相が理解されるべきである。空海は今、「日本の方法」の「マザー」あるいはオペレーションソフト(OS)としてよみがえるべき時にある。(中略)

研究者や文筆家が書かない空海もそこにいる。真言僧でなければわからないあるいは言えない空海もいる。少しラジカルな空海の軌跡もある。本書が、空海を深く広くそしてまともに知りたい方の座右に置かれ、「よみがえる空海」のためにいくばくかお役に立つとすれば望外の幸せである。(本書より抜粋)



平戸田ノ浦 空海渡唐解纏の地記念碑

長澤弘隆 ながさわ・ひろたか

略歴

1943年、東京生まれ
早稲田大学大学院東洋哲学科博士課程修了
福井康順主任教授に師事し、中国の儒・仏・道及び日本の思想を学ぶとともに、栗田直躬・楠山春樹・三崎良周・菅原信海の各教授にも東洋思想とその文献を学ぶ。また、宮本正尊・金倉円照・西義雄・平川彰の各教授にインド哲学と印度仏教及びその文献を、原実・田中於菟弥の各教授にサンスクリット語学及び文典を学ぶ。
他方、得度受戒の師竹村教智大僧正(真言宗智山派管長)から加行念誦法を受法。那須政隆大僧正(大正大学学長、真言宗智山派管長)から伝法灌頂・講伝を受ける。伝法大会を厳修し師位に就く。

現在、真言宗智山派満福寺住職、
密教21フォーラム事務局長

♣ご注文・お問合せは
下記へお願いいたします

図書出版株 ハブル社

〒169-0051
東京都新宿区西早稲田 1-8-22-2 F
Tel 03-3203-3357
Fax 03-3203-2156